## 海外だより

# 老齢問題に関する白亜館会議の準備

8月12日から3日間，ミシガン大学主催の第23回老齢問題に関する年次会議 Annual Conference on Aging が“老人の役割：70年代の展望” Roles for Older People; Prospects for the 70s をテーマに開かれています。40州以上から400人以上の関係者（主に老人です。老人問題の専門家は老人だという国柄ですから）を集めてなかなか盛大です。学校の方はさぼれる限りさぼって顔を出していますが，あい憎なことに授業時間と重なっていて余り思うようにはいきません。昨日の午後のパネルで「老人は自らの役割と責任をどのように考えるか」というテーマが取上げられ，まずストレイブ博士 Dr. Gordon F. Streib が講演を行いました。例によって退職に伴なう役割内容の変化とか，早く退職した老人の方が役割意識が低いといった報告が行われました。それに対して老人の側から「あなたは早く退職することに反対するのか」，「私は自由を楽しむために早く退職したいのだ」といった反問がなされ，講師は無事に帰れるうちに帰った方がよさそうだから，これで失礼と逃げ出してしまいました。

その後，6人の老人がパネラーとして壇上に並び，それぞれ内容のある面白い話をきかせてくれました。いずれも州知事だったとか72歳で現役の彫刻家とかいう人たちです。その中の1人が今日は大学の先生方から結構な話をうかがったが，いうなればリップ・サー

社会保障こぼれ話

### カメルーンの年金保険

この国は1969年，1月の法律で，老齢・廃疾・遺族年金保険制度を採用した。

この制度は，労働法典を適用される全労働者と，その他の稼得活動者をカバーすることになっている。老齢年金は加入20年後の60歳で支給され，年金は3年もしくは5年間の平均賃金月額の30%を基本年金額とし，加入180カ月以上の12カ月当り1%ずつ増額され，最高は80%に制限され，最低は各地の最低賃金のうち，最高額の50%以上とされている。廃疾年金は老齢年金と同一方式で算出されることになっており，世話が必要な者には，年金の40%が加えられる。遺族年金は各種の条件により支給される。

制度の財源は労使双方が負担し，被用者の拠出は使用者より大きくてはならないことになっている。

（平石長久　社会保障研究所）

ビスで口先だけの解決策にすぎないという批判をしていました。聴衆の1人はさらに，一般論はもう沢山だ，具体的な問題を，コミュニティレベルでもっと具体的に取り上げた方がいいのではないか，と身近な問題とのズレにいらだって強い発言をしていました。

今日の午後は円卓会議で老齢問題に関する白亜館会議 White House Conference on Aging への勧告を起草しました。それの主題となったものはつぎのことでした。

「退職というのは拘束から解放された個人の自由にまかせられた期間—彼がそうしたいと望むならば，彼自身の関心とニードに適した新らしい役割を探す期間—としてみなされるべきではないか。あるいは，(1) 老人の地位や与えられた役割に対して，積極的な形で老人の期待を発展させる，(2) 新らしい役割をもつ機会を作り出す，(3) 老入の受け入れを奨励する，といったことに政府はリーダー・シップが十分に発揮できるようにさせるべきではないか」

討議のなかで，政府がリーダー・シップをとることは，すなわちコントロールの強化を認めることになるのだ，という意見が強く，政府ではなく，それぞれの州とかコミュニティが責任を持つべきだという発言が印象的でした。

とかく今年は老人問題に関する白亜館会議の準備会議ということで，これから老人のための老人による会議が活発に行われる様子です。来年は本会議の年として，1～4月はコミュニティレベル，5月は州レベル，そして確か11月に連邦レベルの会議が開かれ，再来年は本会議終了後の会議 Post Conference Year でその具体化が問題になる年といったスケジュールのようです。

それから "Time" の8月3日号で，老人問題を特集しています。賛成できる意見あり，反対したい意見ありで，結構面白く読みました。

（村山冴子　ミシガン大）

## 編集後記

ほとんど雪をみない東京で，雪と氷の遠い山々を想う。毎年，ランプの下で話をした初老の炭焼きを思い出しながら，雪に閉された山里に住む人びとの生活を思う。毎日，雪崩におびえながら，小学校に通う子供達がいるそうだ。親代々の諦観で，かれらは毎日の通学に耐えているのだろうか？　白銀の峰を美しいといい，樹氷に幻想の世界を感ずるのは，雪に縁の薄い都会の人びとの話である。かれらに，体も埋まるほどの雪の道で，低学年の子供らをかばいながら，毎日学校に通う子供達の生活が理解できるだろうか？　それはともかく，その子供達が成長して，雪の山里を遠く離れると，雪道の通学もなつかしいものとなるだろう。

（平石）

海外社会保障情報　No. 13

昭和46年1月25日発行

編集兼発行所　社会保障研究所

東京都千代田区霞が関
3丁目3番4号
電話 (580) 2511～3